

家庭と家族の復権を

上 廣 榮 治

新年明けましておめでとうございます。

お正月といえ、ある程度ご年配の方であれば、こんな光景が思い出されるのではないでしょう。元日の朝、晴れ着に着替え居間の襖を開けると、床の間を背に父親が正座をして、その横に着物姿の母親が座っている。家族みんながそれぞれの席にそろると、みんなで新年の挨拶をする。父親が「今年は一層切り詰めて、しっかりみんなでがんばっていきましょう。太郎は今年からは中学だから、英語をしっかりと勉強しなさい。何といつてもこれからは国際化の時代なのだから」などと一条の訓示があつて、おもむろにお年玉が手渡されて、お屠蘇とお雑煮になる……。

つまり、かつてのお正月とは、「家族で迎える」ものであり、また、元日の朝とは、父親が家族の新しい一年について、しかるべき目標や抱負を述べるときであつたのです。

家族で迎えるものだったお正月が、いつしか一人一人が勝手に迎えるものになり、お正月といつても特別のことではなく、単に長めの休日にすぎなくなつてしまつたのは、やはりここ二、三十年の間の、

日本経済の発展や社会の安定・平和ということが原因だったのではないかと思われれます。

四十年前、五十年前の社会といえ、まだずいぶん混乱した状態でした。平穩にお正月を迎えることができたとしても、明日は何が起こるか分からない、そんな不安な時代であったのです。

そうした社会状況にあつては、「頼れるものは家族だけ」という思いも強かつたに違いありません。今年こそよい年であつてほしい、よい年にしたいという願いも家族全員のものであつたように記憶されます。それがあの時代の、そしてそれ以前のお正月の朝という特別の気分を形作つていたのでしょう。

しかしそれから、長い安定の時代が始まりました。収入も右肩上がりに増え続けました。新幹線が走り、高速道路が延び、地方と都市の格差も縮まり、毎年毎年、着実に豊かになっていくように思われる時代が続いたのです。

かくして、今年の決意も今年の目標もなくなつて、去年同様であればいい、適当にやつていけばいいといった、弛緩した空気が社会全体に蔓延していったように思います。

そして十年前に、まるで青天の霹靂のようにしてバブルの崩壊だ構造腐敗だといわれるようになったのです。しかし、社会の弛緩と腐敗とは、すでにそのずっと前から進行していたのです。そして、この間の弛緩と腐敗が、家族のあり方にも深刻な影響を及ぼしました。

昨年、私は「倫理が築く二十一世紀」のなかで「昔、家庭にはすべてがあつた」と書きました。家庭には毎年、お正月やお盆や祭礼があり、婚礼も出産も、法事もお葬式も家庭で行なわれるのが普通でした。どこかの家で慶弔があると、近所の人や親戚が集まつて手伝いました。もちろん子育ても家庭で行なわれていました。まだ社会は文字通り「家族のほかに頼るものなし」の状況であつたからです。

それが、お正月には個人個人が勝手にスキーや海外旅行、お盆は友だちとリゾートへ、慶弔も食事も

子育てまでも、しかるべき施設で簡便に済むとなれば、家庭とは単なる寝る場所でしかなくなりません。

人々はいつの間にか「家庭」「家族」というものと真剣に対峙することを忘れてきたのです。家庭で行なわれていたさまざまなことを、便利だから、楽だからと、お金で肩代わりさせることで、家庭と家族が何を失うのかを誰も考えてみようとはしなかったのです。

父親の権威がなくなった。家族が乾いた砂のようにバラバラになってしまった。子どもが親の愛情を信じない。親が子どもを指導できない。自己主張ばかりがあつて、家族のことを考えない……。

そのよつて来たところが奈辺にあるかは明らかです。家庭から何もかもがなくなつてしまったからです。家族そろつて食事をすることもない家庭、子どもが帰つても母親がいない家庭、父親は寝に帰るだけの家庭、年寄りを捨てて顧みない家庭、祭事も慶弔もない家庭。そんな家庭に家族の強い紐帯を期待するほうが無理というものです。各々が各々の都合によつて、勝手に行動するほかはないのです。親に相談することもないはずですし、親の言うことに素直に従う子どもがあらうとも思えません。

すべては、それぞれの家庭が悪いのです。みんなが家庭と家族の大切さを思つてみなかったのです。自分の家は大丈夫だと能天気思い込んで真剣な対応を欠き、一時の平穩や豊かさに奢り、怠り、弛緩して、家庭を空洞化させてしまったのです。

お正月とは、家族の紐帯の確かさを確かめるよい機会です。それがお年玉を貰えるだけの、長く休めるだけの期間、大掃除もなく御馳走を作る大騒ぎもない退屈な数日間になつてはいないでしょうか。

家庭からすべてがなくなろうとしている現在、お正月はほとんど最後の砦のように私には思われます。せめてお正月ぐらいは、家族一緒に晴れやかな装いと新たな気持ちで、互いの抱負を語ることがあつていい、いやあるべきだと思つたのです。

幸か不幸か、日本はいまだ長い不況のトンネルを抜けることができずに苦しんでいます。行政は国民の福利厚生ふくりこうせいの面倒が重荷になってきているように思われます。銀行も生命保険会社も危うくなりました。今や私たちが頼りうるものは、家族しかない状況になりつつあります。夫婦が親子が支え合い支え合つて、仕合わせへの道を拓ひらいていくほかに、もはや道は残されていないように思われます。

家族が「頼るものはほかにない」という固い絆あひだを思い出し、力を合わせて今の苦難を福門につなげていく。今こそ絶好のチャンスなのではないかと、私は思います。そして、弛緩した家族の手綱たづなを締め直すのに最もよい機会が、このお正月なのです。抱負を語るなどは照れくさいなら、家族一揃に初日の出を拝おがみに行くのも、初詣はつもちに出掛けるのもよいでしょう。一年にたった一度の家族一揃のお正月こそ、家庭と家族を真剣に捉とらえ直す貴重なチャンスなのだと、しっかりと認識していただきたいのです。

わが会では、欠かすことなく元日の朝に元朝式を行なつてまいりました。私も皆さんにご挨拶をさせていただきます。今年のお正月は、抱負を語ります。私にとつて、それは家庭における元旦の行事と同じです。なぜなら、会友は家族と同じだからです。皆さんもまたそうご認識くださっていることと信じております。毎年毎年の元朝式の壇上で、私はいつも「この会、この家族のほかに頼るべき人々はない」との思いを、年々重ねているのです。そして、互いに仕え合い支え合つて、新しい日々を共に強く生きよう、共に実践まじに邁進まいしんしようと、誓うのです。

お正月とは、新しい未知の一年が始まるときです。何が起こりくるのかは、人知をもって計り知ることはできません。しかし私には、少しの不安もありません。なぜなら、私は一人ではないからです。わが会という大家族が、心一つにして実践に努め、互いに仕え合う仕合わせを目指しているからです。今年もまた一年、しっかりと力を合わせて、倫理の実践と普及に邁進してまいりましょう。